

18 明治期の倫理学関係著（訳）書の中国における伝播

龔 穎

明治維新の後、日本における西洋倫理学（Ethics）の受容が本格的に展開されてきた。それ以来、倫理学という専門分野は、導入期、改造期、自立期、創造期などのいくつかの段階を経て個性に富む日本近代倫理学を作り上げてきた。そのうち、1920年代までの日本において築かれていた倫理学関係の翻訳または研究成果は、草創期にあたる近代中国の倫理学に多大な影響を及ぼし、中国の倫理学の成立を促したといっても過言ではない。近年、中国の学界において、この問題に新たな関心がよせられ、より詳細な検討や考察が期待されているところである。

この大きな課題を解明するに先立って、本稿はまずいくつかの具体例をあげ、明治期の倫理学関係著（訳）書の中国における伝播の一端を確認してみたいと思う。

1. 梁啓超による倫理学関係書の紹介と翻訳

中国においては、古代から豊かな道徳思想が創出・伝承されてきたが、「倫理学」という体系的な学問は、西洋からの受容によって確立されたものである。倫理学の中国における導入期あるいは受容初期において、日本亡命中の思想家、革命家梁啓超（1873-1929）が果たした役割は大きい。

梁啓超、字卓如、号任公、別名「飲氷室主人」である。1873年、中国広東省新会地域茶坑という村に生まれ、幼少から自宅にて伝統教育を受けていた。周知のように梁啓超は1898年の「^{ぼじゅう}戊戌維新」という運動のリーダーであった。この維新運動の失敗によって梁は朝廷の逮捕を逃れるために日本亡命が余儀なくされた。在日中の梁は、日本語で書かれた西洋哲学、倫理学関係の書物を大量に閲覧した。その中でも特に彼に大きな影響を与えたのは、ベーコン（1561-1626）、デカルト（1596-1650）、ホッブス（1588-1679）、スピノザ（1632-77）、モンテスキュー（1689-1755）、ルソー（1712-78）、カント（1724-1804）、ベンサム（1748-1832）、ダーウィン（1809-82）などの著作であった。梁は一方でこれらの思想や学説を入念に読んで吸収しながら、また一方では矢も盾もたまらず、自分の創設した『清議報』、『新民叢報』、『新小説』で積極的にこれらの西洋哲学、倫理学の思想を紹介し広めた。

これらの雑誌上に発表された文章は中国近代知識界に広範かつ深遠なる影響を

与えた。また、その中に含まれた西洋倫理学関係の紹介、翻訳などは、中国近代倫理学の基礎となった。梁啓超の署名による倫理学関係の紹介、編訳は主として次のようなものが挙げられる。『清議報』紙上の「霍布士 (Hobbes) 学案」、「スピノザ (Bruch Spinoza) 学案」、「ルソー (Roussezu) 学案」など、他には「近世文明の始祖としての二大家の学説」(『新民叢報』第1号、第2号、1902年正月掲載)、「法理学の大家モンテスキュー (Montesquieu) の学説」(『新民叢報』第4号、第5号)、「社会契約論の巨頭ルソーの学説」(『新民叢報』第11号、第12号)、「功利主義の泰斗であるベンサム学説」(『新民叢報』第15号、第16号)、「進化論の革命者の学説」(『新民叢報』第10号、第16号)、「新民説」、「論私徳」など。そのほかに、道德思想と密接に係る文章は次のようなものがある。「天演学の始祖であるダーウィンの学説及び其略伝」、「古代ギリシアの学術を論ずる」、「東籍月旦」、「アリストテレスの政治学説」、「近世最大の哲学者カントの学説について」および「政治学大家ブルンチュリ (Bluntschli) の学説」(『新民叢報』、1903年) などがある。

ここでは特に注目すべきなのは『東籍月旦』の中で紹介された倫理学関係書である。梁啓超は『東籍月旦』の第1章「倫理学」の中で述べているように、倫理学の必読書と参考書の書目を提供し、人々が彼の推薦順に従って漸進的に倫理学の知識を身につけ、「完全なる倫理学を發明し其れを以て国民に提唱する」ための基礎を築いていくことを望んでいた。この推薦書目に、西洋倫理学の古典の日本語訳と、西洋倫理学を受容した日本人学者の手による研究書や倫理学の教科書がある。

次は「必読書」と「参考書」という2種類に分けられた書目の詳細である。第1種類の「必読書」は次の2冊である。

- ①『(中等教育) 倫理講話』元良勇次郎著、明治33年 (1900)、東京、右文館
- ②『倫理通論』井上円了著、明治20年 (1887)、東京、普及社

梁は、これらの書物の章節の見出しを詳しく並べ、具体的な内容を読者に知らせようとする。彼はまた、両書に共通する長所は、言葉が簡潔で、意が尽くされていることにあり、初心者に適すると評価した。さらに、上記の『(中等教育) 倫理講話』には講義内容の復習のための「問題」が用意されており、それを熟考し、解答を読むことを通して、読者を啓蒙する作用があると言い、後者の『倫理通論』は倫理学史上の様々な学説や流派の形成及びそれぞれの変化過程を簡潔かつ明瞭に記述し、今後の学術研究や新道德の構築のために良い参照になる、と紹

介している。「もし学ぶ者にたくさんの書物を閲覧する暇がなければ、この2冊のみを読んでいだけでもこの学問の梗概を知り得る」と断言する。

第2種類の「参考書」は合計14冊があり、具体的には下記の通りである。()の中は原著者の名である。

- ①『(中等教育) 倫理学教科書』(ポール・ジャネー著、岡田良平講述)
- ②『新編倫理教科書』(井上哲次郎/高山林次郎合著)
- ③『修身原論』(フランク著、河津祐之訳)
- ④『倍因氏倫理学』(アレクサンダー・ベイン著、添田寿一訳)
- ⑤『珂氏倫理学』(ケルダーウット著、中村清彦訳)
- ⑥『斯氏倫理原論』(スペンサー著、田中登作訳)
- ⑦『倫理学新書』(ヘルマン・ロツツェ著、立花銑三郎訳)
- ⑧『倫理学』(元良勇次郎著)
- ⑨『越氏倫理新篇』(シー・シー・エップエレット著、渡辺又次郎訳)
- ⑩『倫理学説十回講義』(中島力造編)
- ⑪『倫理学史』(山本良吉著)
- ⑫『東洋西洋倫理学史』(木村鷹太郎著)
- ⑬『主楽派之倫理説』(網島栄一郎講述)
- ⑭『賽斯氏¹倫理学綱要』(田中達/渡辺竜聖共著)

以上の書物のほかに、梁啓超は東京育成会が企画、出版した翻訳書シリーズ「倫理学書解説」(全12冊)を紹介したこともある。このシリーズに収められた本はすべて日本人の手によって翻訳または編訳された欧米倫理学の名著であり、しかも訳者の解説文も付けられ、読者にとって利用し易いものだ、と梁は高く評価していた。

このように、梁の紹介によって、長い歴史を積み重ねてきた中国人の道德史上に初めて「倫理学」という学問体系が登場してきたのである。

2. 著(訳)書の伝播と思想の伝達

さて、明治期の倫理学関係著(訳)書の伝播に伴い、新しい倫理観も20世紀前半の中国に伝来された。この問題については今後、緻密な比較研究が期待される

1 「賽斯」は、「セス」の当時の中国語表記である。

が、ここでは1、2例を挙げることにとどまる。

中国へのT・H・グリーン倫理思想の伝来

先述したように、梁啓超は『東籬月旦』の中で、日本でも出版されて間もない翻訳叢書「倫理学書解説」（全12冊）を紹介していたが、中には西晋一郎著『グリーン氏倫理学序論』というT・H・グリーン倫理学に関する解説書が収められている。梁はこれを中国語で『格里安倫理学』と名付け、「とりわけ浩瀚大で、内容豊かなもの」の一つとして評価したと同時に、さらに、T・H・グリーンをジョン・エス・マッキンジと同等に認め、両者ともにイギリスで当時、最も有名な倫理学家であって、「其書精深博大、可称斯学之淵海」（その書は精深博大なり、斯の学の淵源だと称すべき）、と高く評価した。梁は「格里安」（中国語読みはGe Li An）をもってグリーンの名を訳し、初めてグリーンとその倫理学代表作を中国の知識界に紹介したのである。ただし、梁の推薦、紹介はきわめて簡略かつ大雑把であったため、中国の知識界はグリーン著作の書名しか知らず、その具体的な思想内容については知りようがない状態であった。

1906年11月、留日知識人、張東蓀（1886-1973）などの主催する雑誌『教育』（第2号）上に、当時東京帝国大学哲学科選科に留学していた藍公武の「英哲格林之学説」（イギリス哲学者グリーン之学説）という文章が発表された。この文章は約5千字で、八つの節からなる。「一、グリーン学説の由来」、「二、グリーン倫理学説」、「三、自我」、「四、客観世界」、「五、自由」、「六、道徳の理想」、「七、道徳の進歩」、「八、結論」。これは近代中国倫理学史上において本格的にグリーン思想を紹介した最初の記事といえるが、しかしその内容は依然として非常に簡略で、ほかの原因も加えてその影響力はそれほど大きくなかったと思われる。

中国の知識界において、「自我実現説」を始めとするT・H・グリーン倫理学の思想や主要概念が多くの人々に読まれたのは、それから10年後の1916年であった。それは著名な教育家、学者である楊昌濟（1871-1920）が『東方雑誌』に発表した長編連載翻訳文の一部であった。楊氏は現代中国の最も有名な政治家である毛沢東の恩師かつ義父（毛の最初の妻楊開慧の父）にあたる人物であった。

楊昌濟による倫理学の伝播

楊昌濟、字は懷中、号は華生、冊名は昌濟であった。1871年に湖南省長沙県清泰郷の板倉沖（現在の開慧郷開慧村）に生まれ、14歳までは私塾の先生であった父の指導のもとで学習し、1889年に科挙試験に合格し、「秀才」となった。楊

は1898年の「戊戌維新」の失敗に強い刺激と教訓を受け、大衆啓蒙のために、先進国の西洋諸国に学び、民衆指導に実用でかつ具体的な知識や方法を身につける必要を感じて、1903年春から海外に渡り、10年も続く洋の東西を跨る海外留学の旅を始めたのである。

1903年4月から1909年3月までは、日本の弘文学院と東京高等師範学校（現在の筑波大学）で相次いで勉学し、西洋倫理学、心理学、教育学などの知識や思想に接することができた。

1909年春、楊はイギリスに赴き、1912年上半年期までスコットランドのアバディーン大学で勉強し、人文学の学士号を獲得した。その後、ドイツに赴き、教育関係の考察を9ヶ月間行ってから、1913年春に帰国の途に着いた。

帰国後の楊昌済は、「強避桃源作太古、欲栽大木柱長天」（桃源を上古の理想郷と見てそこに逃避し、そこで天を支える柱になれる大木を栽培しよう）という教育への遠大な志望を持ち、1913年から1918年までの5年間、湖南高等師範学校、省立第一師範学校など多くの学校で哲学、倫理学（修身科）、教育学、心理学などを講義した。学生から熱く歓迎され、社会の進歩と個人の成長を求める多くの青年が周囲に集まってきた。これらの青年は後ほど「新民学会」という革命団体の初期会員の主幹になった。またこの間、楊は大量の論文と教材を書き、外国語からの翻訳も行い、特に「各種倫理主義の略述及び概評」という長編連載翻訳を1916年の『東方雑誌』第13巻第2、3、4号に発表した。この論文の原著者は深作安文（1874-1962）であり、文中は「自我実現主義」という節題でグリーン倫理学の基本を紹介・論評した。

1918年夏、楊昌済は北京大学の教授として招聘され、哲学学部の倫理学と倫理学史の授業を担当した。この時、楊は当時の思想界の革命運動である「新文化運動」に興味を示し、北京大学で「哲学研究会」の創設に参加した。さらに学生たちのフランス留学運動を支持し、また留学生を伴って上京した失業中の毛沢東を北京大学図書館で働かせた。その間、楊は毛を中国共産党創立者の一人である李大釗に紹介し、実質上、毛をマルクス主義の道に導く役割をもったと思われる。

毛沢東は、長沙で楊昌済に従って勉強した時、楊の翻訳した吉田静致著『西洋倫理学史』（原書名『西洋倫理学史講義』富山房、1905年）に強く惹かれ、その翻訳原稿を書き写して、それは大判ノート7冊に及んだ。また、毛は、楊が講義で使うバウルゼン著『倫理学原理』（「倫理学書解説」第4分冊、東京育成会、1901年）をより入念に読んだらしく、約1万2千字の読書メモを書き止めている。これらの教科書や講義の中にグリーン「自己実現」や「精神上の個人主義」という内

容が含まれ、青年毛沢東の自由主義、個人主義の形成にも影響しただろうといわれる。

1920年1月、楊昌済は49歳の若さでこの世を去った。その後、毛沢東は楊の日本語からの訳書『西洋倫理学史』と『倫理学之根本問題』（リプスの原著に対する阿部次郎の抄訳本）という2種類の本を、宣伝広告用の図書目録『文化書社』（1920年11月号）に入れた。「楊訳倫理学書」の影響範囲を確実に拡大したに違いない。

明治期倫理学関係書と蔡元培著『中国倫理学史』『中学修身教科書』

教育思想家、蔡元培（1868-1940）の執筆した『中国倫理学史』（1910年）は、西洋の学問体系に基づいて誕生した中国最初の倫理学史である。その内容も叙述の方法も中国伝統的な「学案」や「経学史」と違って、中国従来の道德思想や言説を斬新な視点によって再構築した画期的な著作だと評価されてきた。この本の成立については、著者が「序例」の中で、1910年の旧暦3月16日（4月25日）に執筆が終わったと表明している。その時、蔡はドイツのライプチヒ大学に留学中であった。その年の8月にこの本は商務印書館から印刷発行された²。

著者蔡の「緒論」の説明によれば、『中国倫理学史』の著述は、主に3種類の日本語の著書を参照した。内容面は主として木村鷹太郎著『東洋西洋倫理学史』（博文館、明治31年）と久保得二著『東洋倫理史要』（育成会、1904年）を参考にしてきた。また、蔡の自叙伝『自写年譜』によると、時代区分では基本的に遠藤隆吉著『支那哲学史』の「三期分叙法」に依拠しながら、独自の補足部分を付けた。蔡の『中国倫理学史』が遠藤の『支那哲学史』から受けた影響は分かりやすいものである。つまり蔡は、中国倫理学史を、「第一期 先秦創始時代」、「第二期 漢唐継承時代」と「第三期 宋明理学時代」に区分している。その上に蔡が「付録」として追加したのは清朝の戴東原（震）、黄宗羲（梨洲）、俞正燮（理初）という学者3名である。

しかし、蔡は木村や久保の著書を融合させながら自分の考えを著したため、原著との異同は簡単に分かるものではない。それゆえ、三者を詳細に比較しながらその異同を確認していかなければならない。例えば、木村の『東洋西洋倫理学史』は久保の『東洋倫理史要』とは立場の正反対なものであり、前者は徹底した功利主義者であるのに対して、後者は精神性や人間の意志を重視し功利主義を批判す

2 27年後の1937年5月、蔡著『中国倫理学史』は「中国文化史叢書」第2集として商務印書館から新たに出版された。1941年、中島太郎はこの再刊本を日本語に訳して大東出版社から刊行して、書名を『支那倫理学史』に直している。

る立場を採っていた。一例を挙げると、朱子の学説に関する評価として、木村は「其説を以てすれば浅薄なり」と酷評したのに対して、久保は「朱子の哲学は全体より観るとき、整然たる一大体系を成し」と高く評価していた。したがって、蔡元培がこの両極端にある二作をどのように取舍選択し、かつ融合させたのかを知るために、まず不可欠なのは、緻密な比較研究を通して異同を確認し、そして、なぜそのような取舍選択をしたのかを考え、この本の特色や狙いを解明していくことである。近い将来、この比較研究が行われることを希望する。

1912年1月、中華民国の成立とともに、蔡元培は中華民国初代教育総長をつとめることになる。教育総長に着任して間もない蔡は、「新教育に対する意見」という一文を発表し、これから中国で「新教育」つまり西洋式教育を実施しようとする抱負を熱く語っている。同じ年、彼は旧著を改めて『(訂正) 中学修身教科書』を編纂し、出版した。これは中国近代以来最初の青少年向けの徳育教科書というだけでなく、実質上、その後の中国の青少年の道德教育の大枠を決めた存在だと認めなければならない。この教科書は、1912年から1921年までの10年間足らずの間に、16回も版を重ね、広い影響力を与えたに違いない。

この『(訂正) 中学修身教科書』は、合計7万字からなる一冊本で、上、下二篇に分けられる。著者自身の言い方によれば、上篇は「実践倫理学」であり、下篇は「理論倫理学」つまり倫理学の基本的な理論を詳述する。この教科書の中で、蔡は彼自身の道德思想を主張すると同時に、国民の資質を高めるにふさわしい実践の道をも明示しようとした。その道はすなわち「修身進徳」という道德的实践である。この教科書の中で、蔡はさらに道德教育の任務を次のように設定している。つまり、道德教育を通じて人々の道德についての意識を高め、道德的感情を養い、そして道德的意志を固めていき、道德的要望に応じて人々の人格を改善していく。さらに立ち入って検討すれば、蔡著『(訂正) 中学修身教科書』の内容は、井上哲次郎著の5巻本『中学修身教科書』(金港堂、1902年)や『新編倫理教科書』(金港堂、1897年)と密接な関連性があることが分かる。これについては、すでに発表された拙論を参照されたい³。

さて、本稿は明治期の倫理学関係著(訳)書の中国における伝播をめぐって、二、三の実例を取り上げて述べてきたが、実際のところ、問題提起ばかりであって、満足できる解明にはまだ至っていない。

だが、この領域における調査や研究を深めていけば、近代中国における倫理学

3 龔穎「蔡元培与井上哲次郎“本务论”思想比较研究——兼论中国近代义务论形成初期的相关问题」(中国語論文、『中国哲学史』、2015年1期)。

の形成史やその実状がより明確に把握できるだろう。また、倫理学研究や道德教育実践などの面における中日両国間の交渉は1920年代まで頻繁に行われたため、この領域における比較研究を有効に行えば、日本近代倫理学の研究及び道德教育の特質にもまた新たな光が当てられ、より立体的に認識されることになるだろう。